

パネル展

カッパ図鑑



令和8年 6月30日（火）～ 9月27日（日）

関宿城博物館には「カッピー」という河童をモチーフにしたマスコットキャラクターがいます。それは、本館が利根川と江戸川という大きな2つの川に挟まれた場所にあることが大きく関係しています。

今回の展示では、想像上の生き物である妖怪・河童の特徴、姿、昔話・伝説の残っている地域を訪ねながら河童について紹介していきます。

水難事故が多く発生するこれからの時期。この展示をご覧いただき、河童に興味を持たれましたら、安全に十分気をつけながら川面を眺め、先人の想いに気持ちを寄せてみてはいかがでしょうか。

河童の特徴

水辺に生息する想像上の生き物とされる河童。その姿について、いくつかの近世の文献に記述がある。そこで、身体的特徴や性格、行動の特徴などについて紹介する。

【河童の一般的な特徴】

絶滅してしまったニホンカワウソやサル、スッポンがモデルになっている。

年齢	不明
身長	60～100cm ※人間の子どものみであれば4～5歳程度
体重	20～30kg
頭部	深さ 3～6cmほどのくぼんだ皿があり、水が入っていて周囲に毛が生えている。水がなくなると力が出ない。髪の毛の赤いものもある。髪型はおかつぱ。
顔	青黒い。目は丸く、黄色い。鋭い目つきの河童もある。東北地方の河童は赤ら顔が多い。
鼻	人間と同じようなものもいれば、すっぽんのようにとがったものもある。
耳	人間と同じような形をしており、泳ぐ時には弁のようなものが閉じる。
口	サルや犬のような形状で、歯は鋭くとがっている。人間の言葉を話すものもある。
腕	左右の腕がつながっていて、片方を伸ばすと、もう一方は縮む。
手足	指は3～5本だが、4本が多い。爪は鋭く、水かきがあり、泳ぎが得意。
尾	短いものが存在する。尻の穴は3つあり、屁は極めて臭い。
腹部から背中	亀のように甲羅のついているものもある。また、手足を甲羅に収納できるものもある。年齢とともに甲羅に藻が付着してくる。腹部に甲羅のあるものは少ない。卵生のため乳房やヘソはない。
皮膚	カエルのような肌や魚類のうろこのようなものを持つものもある。サルのように全身が毛に覆われているものもある。
その他	雌雄の区別がある。

さいたま川の博物館『平成14年度特別展水辺の妖怪 河童』より抜粋

【河童の特徴的な行動】

人間同様に善いこともすれば悪いこともするし、食べ物好みもある。

	特徴	背景
善行	人間を助ける	薬屋がなくて困っている地域の住民に治療薬の作り方を教える。
	詫び状を書いたり、恩返しをしたりする	いたづらをして捕まると、詫び状を書き、そのお詫びに雨を降らせたり、願いをかなえたりする。
悪行	馬を水に引き込む	水辺の近くに馬をつないでおくと河童に引きずり込まれる。
	人間を溺れさせる	泳ぎの得意な人間を溺れさせる。
	人間も性的対象	女性の尻を触ったり、はらませたりする。恋に落ちて、女性を連れ去る。
好物	キュウリやナス	初物を川に流して川の神にお供えしていた風習から好物になったらしい。
	シリコダマ	人や馬の肛門の奥にある架空の臓器。人間はこれを抜かれると腑抜けになるか死んでしまう。
嫌いなもの	金属	鉄分の渋みを含んだ水は作物によくないから。
	サル	退治された経験から。
	ひょうたん	水に沈まないから。
その他	相撲好き	日没後の薄暗い夕方(17時～19時)になると、水面から上がり、通りがかりの人に挑む。
	住处	水が澄んでいて、子どもたちが水遊びをするような自然豊かな川や沼。千葉県内では養老川・一宮川、沼では印旛沼や手賀沼。人の住むところ、遊泳できるところが多い。

(『河童の系譜』、『河童考』、『富津市史』から作成)



明治時代/「**暁齊漫画7 猩々と河童の首引**」(国立歴史民俗博物館蔵)

海中に住む想像上の生き物・ショウジョウと河童が好物であるお酒とキュウリを前に首引き(座敷遊び)をしている。

河童伝説とその舞台

河童には馬を水に引きずり込んだり、人々を助ける薬の作り方を教たりするなどの伝説がある。そこで、いくつかの河童に関する昔話や言い伝えを紹介するとともにその舞台となった牛久沼や手賀沼、印旛沼などの今を紹介します。



【茨城県利根町】

利根町は茨城県の最南端に位置し、利根川を挟んで千葉県と接している。利根川沿いに豊かな自然の広がる加納新田があり、子ㇿコ河童の登場する『利根川図誌』の著者である赤松宗旦の生家も残る。

←赤松宗旦(旧宅)

右下は赤松宗旦『利根川図志』から子ㇿコ(ねねこ)河童の図(当館蔵)



【牛久沼(茨城県牛久市)】

牛久沼は「河童の芋銭」と呼ばれた日本画家小川芋銭のアトリエ「雲魚亭」がある。近くには「カッパ松」と呼ばれる松の木があり、その言い伝えが残っている。

←日本画家小川芋銭のアトリエ「雲魚亭」

右下はカッパ松



【曹源寺(東京都台東区)】

上野と浅草の間にある曹源寺というお寺は通称「かっぱ寺」と呼ばれ、私財をなげうって地域の灌漑・排水工事を行った合羽商人・喜八のお墓がある。

←排水工事に協力した河童たちを描いた「河童大明神縁起」

右下は河童堂に本尊として祀られている河童大明神



【栗又の滝(千葉県大多喜町)】

大多喜町の養老溪谷にある養老川。栗又の滝はその養老川の上流に位置する。「かっぱ淵に消えた」(安藤操『房総・民話撰』)の舞台となっている場所で、滝の前後にある川の流れが削り取った深みのある場所を「かっぱ淵」と呼んでいる。

※これら以外にも展示しております。

描かれた河童たち

河童がいたとされる言い伝えは全国各地に存在する。今回は江戸時代から昭和にかけて描かれたその様々な姿を紹介します。



←白藤源太(和漢百物語)

慶応1(1865)年

一魁斎芳年

(国立国会図書館デジタルコレクションより転載改変)

上総出身の力士白藤源太が河童の相撲を見物している。足の指は3本で、斑模様の河童が描かれている。



高名二葉艸 ↑

江戸時代末期

月岡昌信

国立歴史民俗博物館蔵

荒源三郎という人物に退治されている河童。河童を描いた初期の作品。注目すべきは河童の身長。一般的に4～5歳程度で身長は100cm程度と記されることが多いが、この河童は人間と同様の身長である。



←江戸名所道戯仁・二 両国の夕立

安政6年(1859)

歌川広景

国立国会図書館デジタルコレクションより転載

隅田川に落ちた雷神が両国橋のたもとから上がろうとしているところを、河童が引きずり込もうとしている。

河童に出合ってしまったら…



↑ 東京開化狂画名所 川童臭気に辟易(下)

江戸時代～明治時代

月岡芳年

東京都立図書館蔵改変

シリコダマをねらってきた河童に屁をかける場面。あまりの臭さに河童もぐったり。

【河童から身を守る方法】

- 1 川や沼に向かった時、河童が近くにいるのか調べるまじないが2つある。試してみよう！
 - (1) 水面につばを吐く。そして、吐いたつばがクルクルと円の渦を巻きながらなかなか消えないときは安全だ。逆に、四方八方に四散する時は近くにいる場合がある。気をつけろ！
 - (2) 水の中に指を入れる。そこで水にぬめりがある時は近くにいるぞ。鎌やのこぎりなどの光った刃物で、水面を十文字に字を書くように切りつけよう。ただし、ケガにも気をつけろ！
- 2 仏壇にあげた飯を食べて刃物を腰にぶら下げていくと、河童に引き込まれないらしい。信じよう！
- 3 どうしても水に入る必要がある時には、前もって両耳両鼻そして尻の穴に小石を詰めると大丈夫らしい。別の意味で危険だ！

(安藤操・清野文男『河童の系譜—われらが愛する河童たち—』より抜粋)

※これからの水難事故が多くなる時期に向けて注意喚起を書き加えています。